



あくしゅ

～柴田眼治前理事長
を偲んで～



〒753-0221

山口大内矢田北五丁目11番21号

TEL 083-927-2800(代表)

083-927-1847(直通)

FAX 083-902-5572(直通)



地域連携室

本年5月に、新元号『令和』が始まり、世の中が新しい空気感に包まれたと感じたのは、はるか昔の出来事のように、山笑う新緑の季節が過ぎ、長い梅雨も終わり、盛夏到来かと思いきや、盆も明け、あっという間に夏も終わろうかとしております。

平成31年3月18日、午前2時6分、前理事長であり父である柴田眼治が心不全増悪のため、78歳で永眠いたしました。3月19日、20日に、山口市朝田おおすみ会館にて執り行いました通夜祭、告別式には、多くの方々にご会葬賜りまして、誠にありがとうございました。2日間にわたり、今まで水生会を支え続けて下さり、また柴田眼治を支えて下さった多くの方々と接することで、改めて、人と人とのつながり、ご縁によって水生会の発展があったのだと、しみじみと実感致しまして、有難く感じております。5月6日には、無事納骨式を行うことができ、この8月には、初盆を迎え、お世話になった方々から改めてあたたかいお言葉・ご挨拶を下さりまして、ありがとうございました。皆さまとお話をさせて頂き、見えてくる・感じられる柴田眼治の姿は、おおらかで、豪快で生き生きとした人物像であったり、どしっと構えた鋭さの中に、愛嬌があるものであったり、どれも微笑ましく感じられることばかりで、皆さまを通じ、父に会うことができていると感じることもあり、そんな時は、近くにいるように感じられ、嬉しく思います。

先月、7月27日、28日には、柴田眼治が情熱を注いだ日本統合医療学会の中国ブロック大会を山口市医師会館にて開催することができました。本大会開催までには、平成16年山口県支部発足時まで遡ります。支部発足時に山口県支部の創設者である柴田眼治と日本統合医療学会の創始者で、現名誉学会長である渥美和彦先生との間で取り交わされた約束でもあり、構想でもありました。渥美先生の構想は、「統合医療は始まったばかりで、広く知られていない。山口県で広げていってもらふことに加えて、できれば中国地方の支部設立に力を貸してもらいたい。そして、いずれ中国ブロック大会を行ってもらふと統合医療が前進すると思う」といった内容でした。その際父は、「時間はかかると思いますが、必ず実現いたします。」と渥美先生と約束を交わしたと聞いております。

改めて、有言実行、不転退の精神をもった、「信念の人」であったと思います。

本大会の懇親会において、大会長代行を務めた当法人の副理事長の柴田三大の述べたスピーチが強く印象に残ったので、以下に紹介させていただきます。

『父は二つの素晴らしいものを残してくれました。

一つ目は「財を残すは下。事業を残すは中。人を残すは上なり」という言葉通り、まさしく、人という財産を私たちに残してくれました。つまり皆さまお一人お一人のことです。

二つ目は、「考え方」です。生前、父は「人は死なない」という「考え方」を持っていました。まず、物質的・科学的な観点からいくと、火葬をすれば、肉体は水蒸気となって雲となり、いずれ雨となって、大地に還る。また、骨も土となって大地に還っていく。次に子供や孫たちには自分のDNAが残されている。自分の記憶が刻まれたDNAが子孫を通じて繁栄されていくので、死ぬどころか生をうみだしている。そして最後に、関わった人たちの記憶、心によって、人は誰かの心の中で生き続ける。「だから、人は必ず死ぬんだが、実は決して死なないのだ。」と言うのです。こういった「考え方」は、非常に前向きで、ポジティブで、達観した「考え方、捉え方」です。この財産とも言える「考え方」に勇気をもらい、しっかりとバトンを受け継いでいくことが、父への敬意を表することでもあり、私たちの存在意義にも通ずるのだと思います。』

(第1回 中国ブロック大会の懇親会 並びに柴田 眼治を偲ぶ会にて)

以上の話を聞き、思ったことは、柴田眼治は確かに亡くなりましたが死してなお、日本統合医療学会の中国ブロック大会が開催されたこと。水生会が存続し続けているということ。これらを考えると、一人の人間の情熱が多くの人々の心を惹きつけ、動かし続けるものであるのだということでした。

医師であり、経営者でもあり、歴史学、考古学、宗教学、易や風水、柔道や居合道、芸術、自然・環境問題とさまざまな分野に関心をもち挑んだ人物でした。

医師としては、肛門疾患の手術を6250例を成し遂げ、山口市の救急体制がまだ整っていない時期から、救急医療に従事していた背景を考慮して頂き、救急医療の功労賞を頂く機会もありました。また山口市初の人工透析センターの開設をし、急性期から慢性期の医療に従事していく中で、全人的に医療を行う必要性を感じ取り、西洋医学だけでなく、相補・代替医療だけでなく、自然環境や経済社会をも、さまざまな人間の叡智を集結させた統合医療の大切さに気づき、人の困難に向き合うことに取り組んでいたのだと思います。



昭和53年、当時は田畑が広がり、牛を散歩させているようなのどかな大内の地に病院を構えたため、排水路工事が必要で、治水工事からのスタートであったと、私が小さな頃、排水路の傍を散歩がてら語っていたのを思い出します。職員19名からスタートし、今や280名を超える仲間が集まり、医療・介護・福祉サービスの提供を行っております。

阪神淡路大震災や東日本大震災など、日本国内で大災害が起きた時には、自分事として心を痛め、どうにかしたいと、何度も現地向かい救援活動に尽力を注ぎました。



地域貢献活動としては、大内倶楽部を始めとする市民団体の方々とは不遇の死を遂げた戦没者や被災者の方々の慰霊を行ったり、郷土や歴史に関するユニークな考察や研究を行った人物でした。

一個人としては、7人の子供と11人の孫に恵まれました。「まだまだ若い。あまりにも早過ぎる」との声をかけて頂くこともありますが、人の何倍も人生を楽しみ全うし自由気ままに、とにかくやりたいことをやりきった父であったなと思います。

子供ながら、一人の人が行ったとは、思えないようなエピソードばかりです。さまざまな業績や努力に対し、国際天文学連合(IAU)によって、小惑星20098番が、『Shibatagenji』と命名された時には本人が一番驚いていたように思います。

父の白石小学校時代からの親友である天体写真家である藤井旭氏の弔電の中で、『星になられた柴田眼治君の御霊も、今やご自身の名の刻まれた『Shibatagenji』と共に永遠に太陽系内を巡り続けることになられるのでありましよう。』とのお言葉を頂きました。

人が亡くなることにより、その人と実際に対面したり、話したり、触れ合うことはできなくなりますが、実は、存在がなくなることにより、いつも以上に、その人のことを想うようになり、さらに身近に、自分の内に入り込んだと強く感じた次第です。

父が亡くなった当日の朝、葬儀場に父の遺体を送り届け、自宅に帰り、非日常の中で、日常の業務に向かうため、いつもの通勤路を歩いていた時のことです。柴田病院と老健アークスの後ろから朝陽が昇っているのを見上げた時、あまり寝ておらず、白昼夢のような状況であったのか、父が「ガハハハッ」と豪快に笑いながら、大きな水色の器を渡されたように感じ、とても大きな器であったので、少しよろめく感覚もあり、その時、水生会を本当に継承したのだな、と実感したのを今でも鮮明に思い出すことができます。

柴田眼治の強い思いを引き継ぎ、これからの大内の地から、当法人の理念に基づき、地域社会に貢献できるよう、職員一同励んでまいりますので、これからもご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

略 歴

氏名：柴田 眼治（しばた げんじ）

生年月日：昭和15年12月15日 東京に生。満州、山口で育つ。

没年月日：平成31年3月18日（享年78歳）



経歴：昭和41年 東京医科大学 卒業

昭和42年 京都大学医学部第2外科 入局

昭和43年 和歌山赤十字病院外科

昭和44年 大阪府済生会吹田病院外科副医長

昭和47年 山口県厚生連小郡第一病院外科部長

昭和49年 山口大学医学部第2外科 医学博士、病棟医長、講師

昭和53年 柴田病院開院

昭和61年 医療法人社団水生会 設立 理事長就任

平成7年 介護老人保健施設 アーユス 開設

平成31年 医療法人社団水生会 会長就任



法人グループ：医療法人社団水生会 柴田病院
介護老人保健施設 アーユス
通所リハビリテーションアーユス
訪問看護ステーションアクティブ大内
居宅介護支援事業所 アーユス
ヘルパーステーションアーユス
ヘルパーステーションつくし
デイサービス Hot Spring
山口市北東地域包括支援センター
SHS鍼灸院

役職：日本統合医療学会山口支部長、IMJ指導医、IMJ認定病院 第1号

山口県臨床外科学会第14代会長

山口ふるさと大学学長 大内倶楽部初代会長、大内史談会などを歴任

その他：日本外科学会 外科専門医、日本大腸肛門病専門医、日本医師会認定産業医

日本体育協会公認スポーツドクター、厚労省更正医療指定医（人工腎臓）

山口県立西京高等学校 学校管理医